CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

研究ノート

今日に見られる贈り物の包み

長谷川容子

1　はじめに

この小論は、「包み」を物質文化的に研究しようとしたものである。物質文化とは、「人類が生きてゆくための物的手段の全体」あるいはさらに拡大して「人類が生きてゆくための物的手段をめぐる文化要素」［祖父江　1978·285］と解釈したい。民俗学においては、民具研究が物質文化研究とされている。私は、民具研究は物質文化研究の一つの分野をなすものであると考えている。

「包み」を物質文化的に研究するには、「包み」の形体と技術をとらえ、そこからその「包み」が作り出された又は作り出す意味や、伝承されてきたアイデアを総合的に考えなければならない。また、その「包み」がどのような場に現われるのか、生活の中でどのような役割を果たしているのかも同時に見てゆく必要がある。

以上のことをふまえ、今日において見られる贈り物の包みについて考えてゆきたい。

贈り物のやりとりは、一般に贈答と呼ばれている。日本における贈答は、年玉・中元・歳暮やバレンタインデー・ホワイトデー・母の日・父の日・クリスマスなどの年中行事に関するもの、出産祝・初節句・初誕生・入学祝・卒業祝・就職祝・結婚祝・年祝などの通過儀礼にともなうもの、災害見舞・病気見舞・新築祝・開業祝・餞別・土産などの事件・出来事にともなうも

の、香典・供物・玉串料などの神事・仏事にともなうもの、内祝い・香典返し・寸志・心づけなどのお礼・お返しに関するものの、大きく5つ分けられる。本論では、「モノを贈るために包む」ことに注目しているので、贈り物の返礼については触れない。

今日の日本の贈答は、百貨店や専門店などの大手小売り店に依存する部分が大きい。百貨店では、贈り物が集中する時期には必ずその用途にあわせた商品や包装を用意している。また進物サロンなどを設け、一年中贈答の用意をしている。その他、各売場においても「贈り物です。」と言えばリボンなどをつけてくれるように、常になんらかの準備をしている。その一方で、個人が包装紙やリボン等を選び、装飾を意識して包むという現象がみられる。

このような、二つの現象を取り上げ、そこに現れた「包み」を次にあげる包みの概念をもとに考察していく。「包み」とは、物A（包まれる物あるいは事）をもう一つの物B（包む素材）で包んで出来上がる新たな物C（あるいは事）であり、「包む」とは、物A＋物B→物Cの→に表れる動作・行為・技術を示す[1)]ものであると、設定する。

2　株式会社三越の場合

株式会社三越（以下三越と記す）は、伊勢松阪の三井高利が1673年に江戸本町1丁目に越後屋呉服店を開店した時から始まる。その後1893年に合名会社三井呉服店となり、1904年に株式会社三越呉服店となる。同年、米国のデパートを手本にデパートメントストア宣言をする。日本全国また海外に店舗を広げながら現在に至る。

今日、三越をはじめ多くの百貨店や商店では、「ななめ包み」・「キャラメル包み」と呼ばれる包み方をしている。三越でも、袋にいれることを除いて、商品はこの2つの包み方で包まれている。以下、イ～ホの項目は、三越新宿店総務部人事課長諸貫隆一氏から聞いた事をまとめたものである。

イ.「キャラメル包み」と「ななめ包み」の違い

「キャラメル包み」は、包む時箱を動かさないで包めるので、箱の中が和菓子や壊れやすいものの包みに適している。その他の商品は出来る限り「ななめ包み」で包むようにしている。これは、実務面では「ななめ包み」の方が「キャラメル包み」と比べて早く包めるからであり、具体的には最後の一か所をシールで留めれば出来上がるからである。サービス面では、シールを剥すだけで、一瞬に包みが開くので「ななめ包み」を採用している。

ロ.「ななめ包み」の包み方（図１）

「ななめ包み」と呼ばれている包み方にも２つの包み方がある。つまり祝儀用と不祝儀用である。祝儀の包み方と普段の包み方は同じであるが、不祝儀の場合は少し異なる。祝儀の場合は、包みが右前（右手であけやすいように）で、袋のくちの部分が良いことがたまるようにと上側にする。不祝儀の場合は、左前（左手で開けやすいように）で、袋のくち部分が悪いことたまらないようにと下側になるように包装する。

ハ. 包装紙

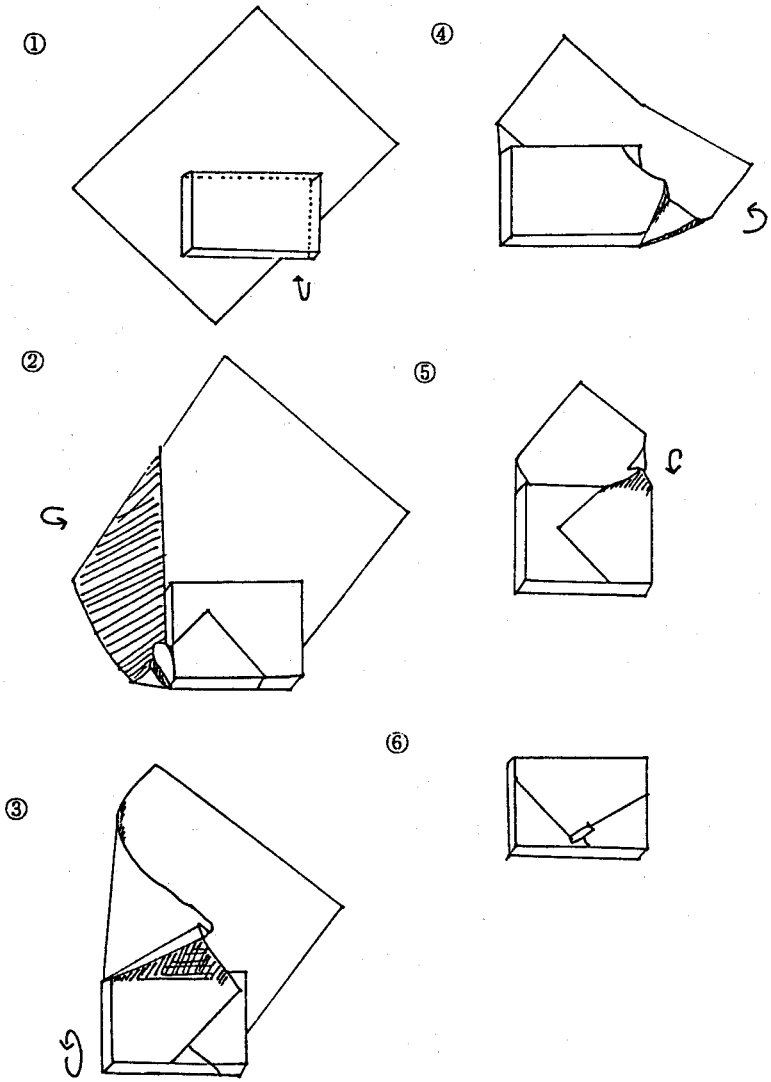
包装紙も祝儀用は赤（普段においても）、不祝儀用は青と使い分けている。クリスマス・父の日・母の日には、特別の包装紙も用意している。

ニ. 掛け紙

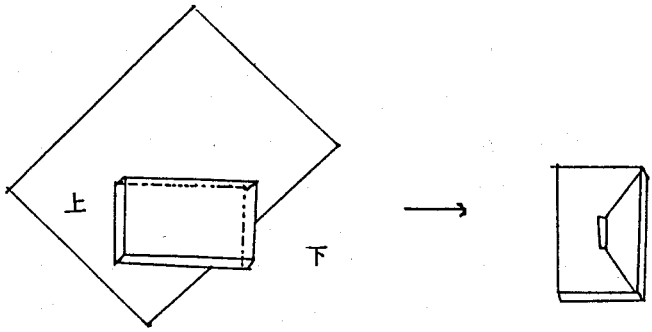
掛け紙は多くの場合、白い紙に水引き・のしが印刷されているものを使用する。祝儀の時は、御祝・内祝のような言葉と紅白の水引き・のしが印刷されている。水引きは、右が紅になるように両なわ結び[2)]になっていて、結納・結婚の場合のみ結び切り[3)]になっている。不祝儀の場合は、志などの言葉と黒の水引きが印刷されているものを使用する。掛け紙の掛け方も祝儀が右前で不祝儀が左前にする。

掛け紙は包装する前に掛ける場合と包装してから掛ける場合とがある。個人対個人の場合は包装する前に掛け、竣工式や選挙などのように贈ったことを広めたい場合は、包装したものの上に掛けるが、これは贈り主の希望による。

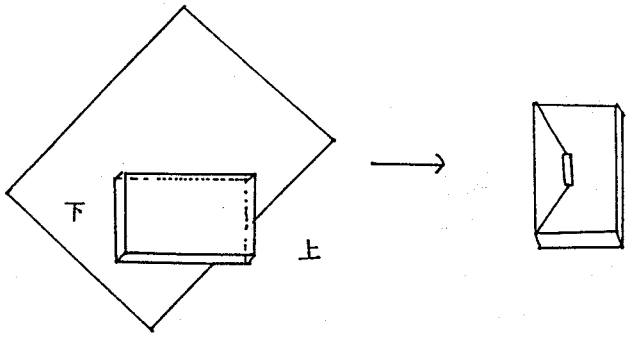
図１　　株式会社三越　新入社員マニュアルを参考に筆者が作成



祝儀用



不祝儀用



ホ．リボン・その他

希望があればリボンをつける。掛け紙とリボンは一緒にしないのが一般的である。現在、新宿三越にはラッピングコーナーがあり、好みの紙やリボン等を選んで買い包んでもらえるコーナーがある。

三越の包装紙は、1911年頃のものから残っている。今日使用されている包装紙は1950年からのもので、猪熊弦一郎画の「花ひらく」と題されたものである。1911年頃から今日まで、使用された包装紙は9種類になる。これらの包装紙は、四隅のうち一か所だけ、破けていたり、シールの跡があるところから、すくなくとも1911年には「ななめ包み」をしていた事がわかる。

3　包み方の本より

今日、包み方の本が数多く出版されている。それらの多くは『ラッピング～』と題され、様々な包み方を紹介している。ラッピングという言葉は、英語のWrapからきていて、動詞で「～を包む、包装する、くるむ」の意味がある。ラッピングは、名詞で「包装材料」という意味もある。

これらの本が対象としているのは、贈りもの（ギフト）の包み方であり、前節でのべたような形式的な包みではなく、贈る事を楽しむための包みである。その為、祝儀用の包み方に焦点がおかれている。例えば、誕生日の祝いや結婚式、バレンタインデーやクリスマスの贈りものの包みが紹介されている。それらの基本となる包み方は4種類であり、そこから創作されたり、包装紙やリボンなどを変えたりして数十の包みが現されている。このような本の対象は、10代～20代の女性である。百貨店にラッピングコーナーが設けられていたり、ラッピングの専門店が流行っているのも、その対象が10代～20代の女性である事は注目すべきであろう。

以下、基本となる包み方4種類を記す。これらは、①長谷良子著『プレゼントの本』（日本ヴォーグ社　1984）、②同著『プレゼント　アイデア』（誠

文堂新光社　1987)、③同著『ラッピング・テキスト』(主婦の友社　1990)、④ZONARTデザインロジェクト著『ラッピングブック』(文化出版局　1985)、⑤同著『ラッピングブック２』(文化出版局　1989)、⑥日本ヴォーグ社編『すてきなラッピング』(日本ヴォーグ社　1991)、⑦エキグチ・クニオ『包み方の本』(日本実業出版社　1985)、⑧株式会社包む『FAIRE』vol1～3（株式会社　包む　1990)、⑨南条武著『包み方の本』(有紀書房　1990)を参考に分類した。

(1)　ななめ包み（図１）

これは、１のロで述べた包み方と同じである。「回転包み」と記すもの③[長谷　1990：15]、「デパート包み」と記すもの⑦［エキグチ　1985：20]がある。缶などの円柱状のものを包む時も、基本は「ななめ包み」と同じである。

(2)　キャラメル包み（図２）

これも、１のイで述べた包み方と同じである。キャラメルの包み方からきていると言われている。同じ大きさの箱を包む時、「ななめ包み」に比べ包装紙の量が少なくてすむ。菓子などの逆さにしてはいけないものを包む時に使用する。

(3)　風呂敷包みあるいはスクエア包み（図３）

これは、「ななめ包み」と「キャラメル包み」をあわせたような包み方で、「風呂敷包み」を記すもの⑤［ZONART　1989：66]、「スクエア包み」と記すもの⑥［日本ヴォーグ社　1991：50］がある。

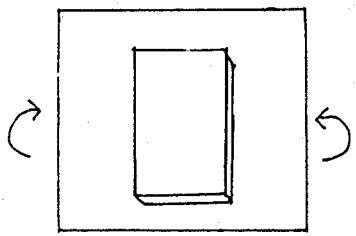
(4)　キャンディ包み（図４）

「キャンディ包み」と記すは③長谷［長谷 1990：34］と⑨南条［南条 1990：22］だけであるが、その包み方の図は①～⑨のすべてに見られる。この包み方は、不定形の物も簡単に包むことができる。包むものの全体を

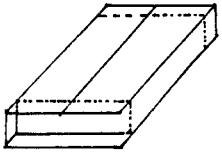
図2

2であげた資料をもとに筆者が作成

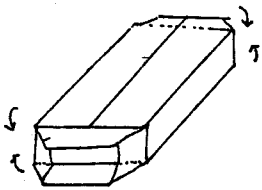
①



②



③



④

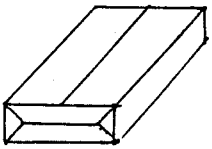
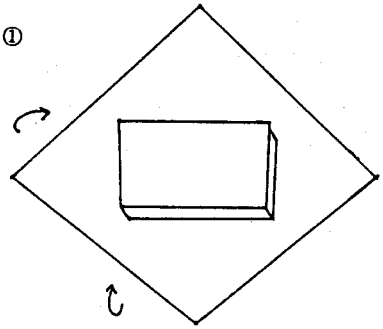


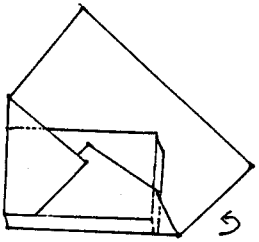
図3

2であげた資料をもとに筆者が作成

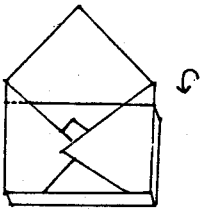
①



②



③



④

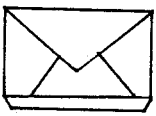
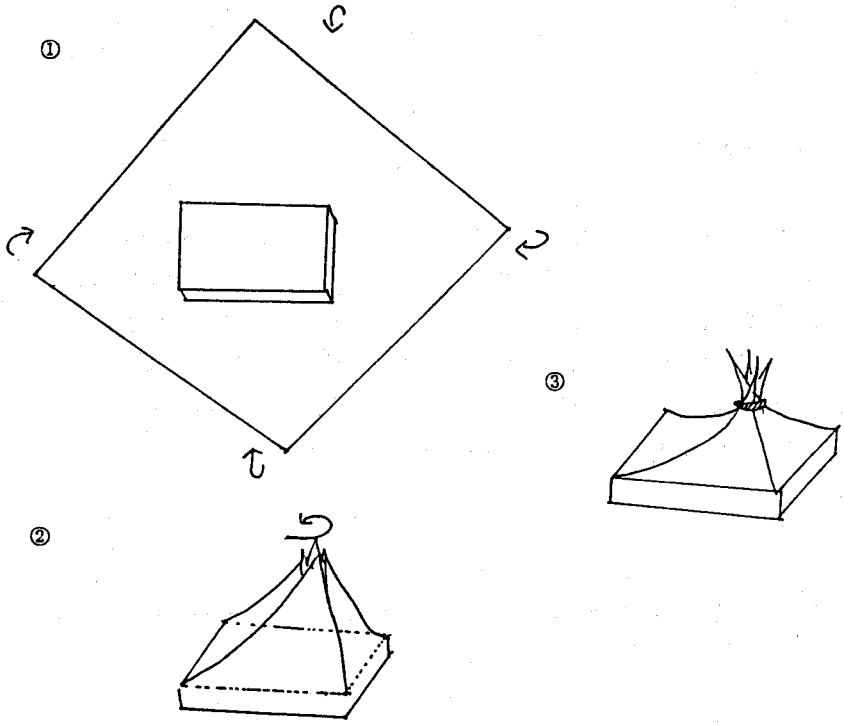


図4

2であげた資料をもとに筆者が作成



覆って上部でまとめ、そこにリボンをかけるなどする。上記の（1）（2）（3）と比べ、紙を折って包むというのでなく、全体を紙で覆ってその上部一カ所を留めるという包み方である。この包みかたは、袋にも応用できる。

以上（1）～（4）までの包み方が基本となり、そこから多様な「包み」が創作される。

4　若干の考察

ここで、A＋B→C式を用い今日における包みを考察してみたい。

三越の場合は、Aは、商品であり多くの場合箱に入っているのでAは箱とする。Bは、包装紙である。Cは、贈りものである。→は、折るという手による技術であり→のところに補足↑として、掛け紙・水引き・のしがはいる。この場合、包みの用途[4]は贈ることであり、その機能[5]は、包みの贈り手と受け手が祝儀用・不祝儀用それぞれの包みに満足しているかどうかである。

	A	＋	B	→	C
祝儀用	箱		包装紙（赤）	→折る「ななめ包み」	→祝儀用の贈り物
				↑	
				掛け紙・水引き（紅白）・のし	
不祝儀用	箱		包装紙（青）	→折る「ななめ包み」	→不祝儀用の贈り物
				↑	
				掛け紙・水引き（黒白）	

贈り物の「包み」は、このような決まり事によって出来上がる。百貨店の「包み」の場合は、百貨店側が送り手・受け手の両者を満足させるように包むといえるだろう。なぜなら、送り手は百貨店に行けば、間違いない「包み」をしてくれるという信頼をもっているからだ。三越だけではなく、各百貨店に進物コーナーのようなものが設置されていることからも百貨店における

「包み」は、今日における贈り物の「包み」の一つの形であるといえる。

２であげた包み方の本から見た４つの包み方は、→の技術を表わしている。この４つの技術はいずれも「紙を折る・あるいは覆う」であり、包みの素材Ｂと深く関わっている。１においても包みの素材Ｂは紙であり、百貨店の場合はこの紙に印刷された模様は、その百貨店を象徴するといっても過言ではない。

「ななめ包み」は「デパート包み」ともいわれているように「ななめ包み」は、百貨店では、代表的な包み方である。祝儀・不祝儀の包み方の手順が少し違う程度で基本的には一つの形である。それに対して、「キャラメル包み」や「キャンディ包み」は、その基本形に手を加える事で様々な包みが出来上がる。例えば、紙にひだを寄せたり、違う色や素材の紙を重ねたりするだけでもその包みの印象は随分変わる。これは、「ななめ包み」の他の３つの包み方が、もっぱら祝儀用においてのみ使用されるからであろう。２で参考にした本では、「ななめ包み」においても不祝儀用の説明がないものが多く[6)]、祝儀用の贈り物でも、誕生日やクリスマスのような場合を主に、取りあげている。その送り手と受け手の関係は、友人等のかなり親しい関係である。

5　おわりに

今日における贈与の「包み」は、次の二つがあると言えよう。一つは、百貨店に代表されるような「包み」であり、格式ばった祝儀・不祝儀の場合である。それぞれの具体的な用途を明確にし、掛け紙・水引き・のし（祝儀の場合のみ）を付け「ななめ包み」によって包まれた「包み」である。もう一つは、簡単な祝儀の贈り物を贈る場合で、「キャラメル包み」や「キャンディ包み」を基本とした装飾が意識された「包み」である。このような二つの「包み」は、今のところ共存している。どちらの「包み」をとるかは、送り手によって決められる。送り手は、その包みの用途と機能を決定し、次に適切な包み方を選択し、「包み」を作るのである。

＜註＞

1)　さらに付けくわえると、→に表れる動作・技術は基本的には手によるものであって、具体的には折る・巻く・掛ける・編む・束ねる・覆う・囲む等であり、物Bは包むことを目的とした素材であること（容器類ははずれる）が条件づけられる。

2)　蝶結びのこと。

3)　二度はないようにと、両端を上にして結び切る。祝儀の場合は婚礼の場合のみ使用される。不祝儀の場合の水引きも結び切りとされているが、両なわ結びにされる場合ある。

4)　包みの用途とは、どのような目的のために包まれるかであり、具体的には、「モノを運ぶために包む」・「モノを保存するために包む」・「モノを保護するために包む」・「モノを贈るために包む」・「モノを飾るために包む」などがある。ここでは、「モノを贈るために包む」が包みの用途になる。

5)　包みの機能とは、「包み」がどのような働きをするかであり、満足がいく「包み」をしているかどうかである。

6)　⑦⑨のみ不祝儀用の包み方を載せている。

＜参考資料＞

1　株式会社三越の場合

大三越歴史寫眞帖刊行会

1932　『大三越歴史寫眞帖』

百貨店商報社　1933　『三越』百貨店商報社

三越のあゆみ編集委員会

1954　『三越のあゆみ』株式会社三越創立50周年記念　株式会社三越本部総務部

株式会社三越85年の記録編集委員会

1990　『株式会社三越85年の記録』株式会社三越

2　包み方の本より

長谷　良子　1984　『プレゼントの本』日本ヴォーグ社
1987　『プレゼント　アイデア』成文堂新光社
1990　『ラッピング・テキスト』主婦の友社
ZONART デザインロジェクト
1985　『ラッピングブック』文化出版局
1989　『ラッピングブック２』文化出版局
日本ヴォーグ社編
1991　『すてきなラッピング』日本ヴォーグ社
エキグチ・クニオ
1985　『包み方の本』日本実業出版社
株式会社包む　1990　『FAIRE』vol1～3　株式会社　包む
南条　武　1990　『包み方の本』有紀書房

〈参考文献〉

荒木真喜雄　1990　『折る、包む』淡交社
ハルミ・ベフ　1984　「文化的概念としての贈答の考察」伊藤幹治　栗田靖之編著『日本人の贈答』ミネルヴァ書房　pp.18−44
伊藤　幹治　1984　「日本社会における贈答の研究」伊藤幹治　栗田靖之編著『日本人の贈答』ミネルヴァ書房　pp.1−16
岩井　宏實　1984　「民具研究の軌跡と将来」『国立歴史民俗博物館研究報告』第３集　pp.223−249
宮本馨太郎　1973　「包装の民俗」『めし・みそ・はし・わん』岩崎美術社
額田　巌　1975　「包みのシステム思考」『物質文化』25 物質文化研究会
1977　『包み』法制大学出版局
祖父江孝男・大給近達・中村俊亀智・大塚和義
1978　「物質文化研究の方法をめぐって」『国立民俗学博物館研究報告』３巻２号　pp.280−336

謝辞

三越の包装についてお話戴いた、株式会社三越新宿店　総務部人事課長　諸貫隆一様と資料に協力戴いた、株式会社三越　総務本部資料編纂室　一色昭寿様に厚くお礼申し上げます。